



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4475号 2018.7.8 発行

不妊手術 「同意」も救済 法制化で与党チーム検討 毎日新聞 2018年7月8日

旧優生保護法（1948～96年）下で障害者らへの不妊手術が行われていた問題で、与党ワーキングチーム（WT）は12日の会合から救済策の検討を本格化する。本人が手術に同意していたとされるケースでも国に救済を求める方向で議論する。与党は被害認定の方法や補償額などを詰めた上で超党派の議員連盟とも連携しながら来年の通常国会での救済法成立を目指す。

旧優生保護法には、都道府県の審査会や保護者の同意を経れば遺伝性疾患などがある人に強制的に不妊手術ができる規定があり、旧厚生省の統計では約1万6500人が対象になった。これとは別に、本人同意に基づく手術もハンセン病施設入所者ら約8500人に行われたとされる。

ただ、当時は本人が意思表示を十分にできない中で同意の手続きが取られていた実態も明らかになってきている。同意の有無で救済の線を引きするのは難しいことから、与党内でも「できるだけ広く救済すべきだ」との声が強い。さらに当事者らからは、子宮摘出など同法では認められていない方法による不妊手術も救済対象とするよう声が上がっており、今後議論する。

手術を受けたことの認定も柔軟に対応する方針だが、毎日新聞の都道府県への調査では個人名などが記された資料は2割程度しか残っておらず、認定条件などの具体案は固まっていない。手術を受けた記録があった場合、本人へどのように通知するかなど課題も多い。金額は、75年まで同様の法律のあったスウェーデンで補償法に基づき1人約200万円支払った事例などを参考に検討する。

一方、政府は同法の違憲・違法性を認めていない。与党WTメンバーの一人は「法令に基づく手術で子どもを産む権利を奪われた人を、法的にどう整理するか難しい」と話しており、救済法の趣旨や目的を巡って政府・与党の調整が難航する可能性もある。【藤沢美由紀、阿部亮介】

「未来広がった」 花田養護学校生が初の信大見学会 信濃毎日新聞 2018年7月7日

信大生らと入り交じり、進路選択などの助言を受ける木下さん（左端）



県花田養護学校（下諏訪町）は6日、大学進学を志望する高等部の生徒らを対象に信州大（本部・松本市）の見学会を開いた。これまで生徒個々に志望大学のオープンキャンパスなどに参加していたが、希望を受けて初めて企画した。2、3年生それぞれ1人が保護者と一緒に講義を受けたり、大学生活や進路選択について学生たちと意見を交わしたりした。

障害者スポーツを研究している信大全学教育機構の加藤彩乃助教が協力。生徒は大学職員の説明を聞いたり、県内の風土や文化を学ぶ一般教養の講義を聴講したりした。

加藤助教のゼミを受講している学生4人との交流会もあり、生徒は親元を離れて生活することや進路選択について質問。学生は「寮は話し相手がいるので寂しくない」「地方で関心のある分野を学べる点で信大を選んだ」などと答えていた。

保健師を目指している3年の女子生徒(18)は「信大への進学は考えていなかったが選択肢が広がった」と興味を持った様子。2年の木下紫桜(しおん)さん(16)は今のところ就職希望といい、「一人暮らしをしたい。生活の大変さが分かった」と楽しそうだ。

交流会に出席した教育学部1年の守屋沙弥香さん(18)は「私が高校生の時と同じ疑問を抱えていると感じた」と話し、交流会の後、今後相談にも乗れるようにと、LINE(ライン)を登録し合っていた。

ススキノ 「どんな人でも気軽に」バリアフリーラウンジ 毎日新聞 2018年7月6日
車いすのお客さんも気軽に楽しめるバリアフリーラウンジ「スターレイン」。手前右は代表の小林輝さん=札幌市中央区で2018年6月15日、竹内幹撮影

障害のある人でも気軽にお酒を楽しんでもらおうと、札幌市中央区の歓楽街ススキノの中心部に、バリアフリーのラウンジ「スターレイン」がオープンした。車いす利用者などに配慮した店内のレイアウトやメニュー表は当事者の声を聞いて準備し、障害者に対応する接客講習も定期的実施。店主の小林輝さん(29)は「どんな人でも気軽に楽しめる店を目指したい」と話している。



ススキノで飲食店を2店舗を経営する小林さんが「スタッフがいつまでも働ける職場を」と福祉事業に着目。ノウハウがある飲食業でバリアフリーに特化した店を開こうと、約1年の準備期間を経て今年4月にオープンした。約15人の女性スタッフのうち2人には聴覚などの障害がある。

事前に知人や利用客の車いす利用者などに意見やニーズの聞き取りを実施。フロア備え付けトイレは「入り口や通路が狭く設備も整っていないため、1人では利用できない」との声が上がり、車いす対応の個室トイレを新設した。

来店客で車いすを利用者の佐藤成二さん(28)は「トイレを設けたり店内の通路を広げたりして座席が少なくなり、利益は減ってしまうはず。それでも配慮してくれたのがうれしい」とグラスを傾けた。

店内の座席は通常より低くし、脇に手すりを付けることで介助がなくても車いすから移りやすくした。テーブルは脚を高くした特注品で、車いすのままでも奥まで入れる。グラスは落としても割れないプラスチック製で、メニュー表の文字は弱視の利用客に向けに字を大きくし、今後は点字メニューの作成も検討している。

小林さんとスタッフ計3人は、障害のある利用客らを適切にサポートできる民間資格「サービス介助士」を取得。月1回、介護士らを講師に招き、障害のある人への接客法や注意点について学ぶ講習を開催している。

常連客で車いす利用者の古藤健太さん(27)は「施設面に目が行きがちだがスタッフの意識も大事。ここは両方が整い、気持ち良くお酒が飲める。こうしたお店がもっと増えてほしい」と期待する。

小林さんは「お店ではストレスや壁を感じないで楽しんでもらいたい。スタッフが気を使い過ぎても失礼になるので、お客さんの声を集めながら改善していきたい」と話している。【安達恒太郎】

「小山評定開運焼き」 「おやまブランド」市役所で認定式 東京新聞 2018年7月7日



認定された小山評定開運焼きを紹介する峰会長（右から2人目）ら＝小山市役所で

「開運のまち」を掲げる小山市で、小山北桜高校家庭クラブの生徒たちが考案したみそ味のおやき「小山評定（ひょうじょう）開運焼き」が、市の「おやまブランド」に認定された。桑の葉やかんぴょうといった地元の食材を使ったおやきで、生徒たちは「小山市や食べる人たちがハッピーで元気になるればと願って作りました」とアピールしている。（小川直人）

家庭クラブのメンバーが中心となって2016年度に商品開発に取り組み始めた。地元の農園で生産される低カロリー、高タンパクのダチョウ肉を入れた調理みその開発から、おやき作りに発展した。

パッケージイラストも生徒が描いた小山評定開運焼き＝小山市役所で

小山評定開運焼きは、具にダチョウ肉や名産のかんぴょうなどを使用。生地には市を代表する農産物の桑の葉をパウダー状にして練り込んでいる。もちりとしたやわらかい食感が楽しめる。「開運」の2文字の焼き印を大きく入れた。

商品は障害者らが働く地域の多機能型事業所で作られる。食のイベントや道の駅などで限定販売されているが、今後、販路の拡大を目指していくという。

市役所であった認定式で、大久保寿夫市長から家庭クラブ会長の峰三友季（みゆき）さん（3年）らに認定証と「おやまブランド」ののぼり旗が手渡された。

峰さんは「生地をやわらかくするため、地元のパン屋さんに協力してもらって試行錯誤したことが良い経験」と振り返った。副会長の島田風紗（なぎさ）さん（同）は「地元の食材でできているので、市民の皆さんにも愛着を持って食べてもらえたら」と話した。

大久保市長は「健康、美容に良い小山の食材がぎっしり詰まっており、小山ブランドにふさわしい」と評価した。

小山評定は、徳川家康が石田三成討伐を決した小山での重要な軍議で、江戸幕府の成立や徳川家の安泰に道筋をつけたとされる。日本の行く末を決定づけたこうした史実などから、小山市は「開運のまち」をうたっている。

日常の笑顔生き生き 宇都宮の障害児者支援施設「うりずん」写真展

産経新聞 2018年7月7日

重度障害児者支援施設を運営する認定NPO法人「うりずん」（宇都宮市徳次郎町）の「写真&作品展～えがおがいっぱい～」が6日、同市立南図書館（同市雀宮町）で開かれている。8日まで。施設利用者の生き生きとした表情が紹介されている日常や行事の写真約100点を展示。同法人事務局の三谷知子さんは「写真や作品を通し、共に生きるまちづくりにつなげたい」と話している。「うりずん」は、小児科・在宅医療のひばりクリニック（高橋昭彦院長）に併設し、開設10周年。重症障害児、障害者が日中に利用する。2年前に市内の別の場所から移転し、事業を拡大。児童発達支援と放課後デイサービス、居宅訪問型保育などを行っている。昨年秋、宇都宮大の写真展に参加し、プロの写真家が利用者を撮影、展示したところ好評だったことから今回の展示を企画した。「楽しく、充実した日々を過ごしている利用者の姿を見てほしい」と三谷さん。施設利用者が日ごろの活動の中で作成した作品も展示している。初日は、利用者らが見学を訪れ、自分や友人の写真を見て楽しんでた。（松沢真美）

Aomori Story 響かぬ「既製品」の支援 ひきこもり高齢化 /青森

毎日新聞 2018年7月7日

昨秋、青森市内のカフェ。名刺を手渡すと、彼は戸惑いながらひと目見て、そっと私に返した。「差し上げますよ?」。不思議に思って声をかけると、彼は頭を下げながら言った。「すみません。もらい方が分からなくて」

「ひきこもり」の高年齢化が進んでいる。県内で1人暮らしの男性は40代。これまで一度も働いたことがない。大学院を修了後、就職がうまくいかなかった。今では一日の大半を自宅で過ごす。男性のスマートフォンには、行政書士や社会保険労務士など資格合格証の写りが収められている。「図書館に通って勉強しました。怠けていると思われたくなかった。でも、どうしても人となじむことができない。行政の窓口で人付き合いができないと言うと、そんなことがあるのかと言われる。どこにも行くところがないんです」

生活費は、発達障害などで受給している障害年金。一人で稼ぐすべを身につけたくて、広告収入を得ようとインターネット上に記事を書いている。日常のこと。好きなゲームのこと。500本以上の記事を書いた。だが、収入に結びつくだけのアクセス数には届いていない。

男性は両手を上げながら、同じ言葉を繰り返した。「もうお手上げなんです」。助けを求める切実な声だった。

国は過去2回、ひきこもりの実態調査を行った。2010年の調査では「学校や仕事に行かない状態が半年以上続いている人」は約70万人。15年は約54万人に減った。だが、調査の対象は15~39歳で40歳以上は含まれない。ひきこもりの状態が「7年以上」の人は17%から35%に増え、長期化と高年齢化が進んでいる。支援団体「青森さくらの会」が17年に行った調査(当事者46人の家族が回答)では、県内の当事者の平均年齢は36.7歳で、最年長は56歳だった。

カフェで出会った男性は、小学校の時から独りだった。「邪魔。どっかに行って」。休み時間、遊んでいる同級生の輪に入ろうとすると、にらみつけられた。「キモイから学校やめて」。高校では女子生徒に真顔で言われた。「どうして一人で遊ぶの?」。親の何気ない言葉も自分を責めているように感じた。

「当時はどうしてみんなが怒るのか分かりませんでした。運動会の全員リレーでみんなの足を引っ張ったり、クラスのものごとをなくしたり。確かに周りの空気を読めていなかったかもしれません。今考えれば、学校を休むとか、気の利いた行動をとればよかったのかな。最初は悔しかった。でも『もう何をしても通じないんだな』と思うようになって、自分から周りとの距離を置くようになりました」

「発達障害」という言葉を知ったのは20代後半の頃だ。勧められるまま受けた精神科の検査で告げられた。発達障害は集団行動が苦手だったり、特定のものへのこだわりが強かったりする傾向があり、人間関係を築くのが難しいこともある。「例えば細かく説明されないと分からなかったり、友達を作れなかったり。あの時、うまくいかなかった理由が分かったような気がしました」。以前から感じていた生きづらさの正体を知り、受け入れることはできた。

ひきこもりが社会問題化する中、県は16年6月、県立精神保健福祉センター内に「支援センター」を開設した。臨床心理士らが電話や面談で相談に応じたり、当事者らに交流の場を提供したりしている。ただ経験の蓄積はまだ少なく、社会復帰や自立に向けたサポートがニーズに追いつくのは難しいのが現状だ。

男性の足は、頼ろうとしてきた公的機関から遠のきつつある。一人でも収入が得られるような方法を提案してほしい。だが、窓口で相談しても「生活保護を受給しては」「ハローワークに行っても」という答えが返ってくるだけだった。「既製品の支援」。男性はそう表現した。

「相談に行っても、精神論ややる気の問題で片付けられてしまう。本当に必要なのは一人一人の実情に応じた『オーダーメイドの支援』なのに。『孤立』がどういうことかを知っ

てほしい。僕みたいに人付き合いができない人間だっている」

答え急がず話聞いて

今年4月、ひきこもりの経験者や当事者が情報発信などを行うNPO法人「Node」(事務局・東京)が設立された。Nodeは英語で「結び目」。当事者同士がつながりを持ち、孤立化を防ぐ。各地の自助グループなどが連携したこの全国組織には、青森県からも当事者の居場所づくりをする「ピアカフェ夢こもり」の代表、下山洋雄さん(37)が理事に名を連ねた。

下山さんもひきこもりの経験者だ。中高6年間ほぼ不登校だった。いじめなどがきっかけだったが、学校に行こうとすると動悸(どうき)や腹痛が起き、自分でも胸の内をうまく言葉にできなかった。雨の降るある朝。学校に行かない息子にいら立った父親が、制服を窓の外に投げ捨てたのを覚えている。「どうすれば理解してもらえるのか」。うなだれるしなかった。

窮地を救ったのは、高校3年の時、新聞の広告欄で見つけた「いのちの電話」だった。すがる思いで電話すると、電話口の女性がひたすら耳を傾けてくれた。時間がある度に電話をかけ、長い時では約4時間も話し込んだ。数カ月たった頃、何気ない安心感を感じるようになっていた。次第に外出するようになり、「自分と同じ状況の人に寄り添いたい」と、8年前から当事者の話を聞く活動を始めた。

「今のひきこもりへの支援は、最初から助言ありきで、本人の気持ちを聞けていない。それで傷つく当事者もいる。答えを出そうと急ぐのではなく、まず話を聞いてみようという姿勢が大事だと思います」

ひきこもりの原因を特定するのは難しい。県立精神保健福祉センターの田中治所長によると、精神疾患や家族の問題を背景にしたものもあれば、明確な理由が分からないものもある。発達障害だからといって、ひきこもりになるわけでもない。部屋に閉じこもり続ける人もいれば、買い物で外出する人もいる。田中所長は「対人関係で緊張や不安を感じる人への理解があれば、その人は持っている能力を発揮できる。ただ、理解が進んでいるわけではない」と話す。

下山さんは、ひきこもりの人と関わる時、聞き役に徹する。あの時、「いのちの電話」で話をただただ聞いてもらった経験があるからだ。自分も学校に行きたくても行けなかった。家族にも思いを理解してもらえなかった。だからこそ、心の痛みや苦しみに共感できる。「つらい気持ちをはき出せた」という言葉が返ってきた時、あの時間はマイナスではなかったと思える。

ひきこもりという言葉は広く認知されるようになった。だが、私たちは当事者の声にどれだけ向き合っているか。下山さんはこう話した。「ひきこもりは社会が作った言葉です。怠け者とか犯罪と結び付けたり、ラベリングすることで当事者を生きづらくさせている。そういう偏見を私はなくしたい」。そして続けた。「ひきこもっている期間は自分を育てる時間。無駄ではないんです。私だってそうだった」【一宮俊介】

講演 親からの虐待根絶へ 被害者3人が活動

毎日新聞 2018年7月8日

社会から虐待をなくしたい――。親からの虐待を生き延びた当事者3人が、体験を社会に発信するグループ「インタナリバティブプロジェクト」を結成した。虐待根絶に向けて、各地で講演を重ねている。

リーダーの橋本隆生さん(40)＝仮名＝は、父親や継母からアイロンを体に押し当てられたり、真冬に裸で外に出されたり、人格を否定するような暴言を浴びたりして育った。つらい現実に耐えかね、死ぬことばかりを考えて過ごした時期もある。

「親は大事にすべきだよ」「親の悪口を言ったら駄目だよ」。周囲の大人に相談しても、そうたしなめられるばかりで、誰も親身になって守ってくれなかった。なぜ自分はこの世に生まれてきたのか。そう自問自答する中で「虐待をなくしていくために生かされている

のかも」と思うようになった。

母の再婚相手から性的虐待に遭い続けた漫画家のヤマダカナンさん(40)＝仮名＝と、身体的虐待や過干渉により精神疾患になったサクラさん(44)＝仮名＝と知り合い、「虐待をなくすためにできることはしよう」と3人でグループを作って活動を開始。体験を話すことが社会を変える一歩になると信じて、大学などで講演をしている。

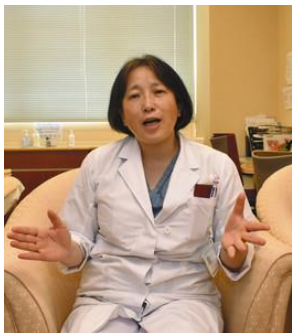
虐待されていた時に周囲に出していたSOSがどんなものだったか。どんな支援があったら良かったのか。虐待を生き抜いてこられた理由は何だったのか。生い立ちを交えて語り、時には参加者と対話をしながら、虐待をなくす方法を共に考えている。

今年3月、東京都目黒区で船戸結愛(ゆあ)ちゃん(当時5歳)が亡くなった。結愛ちゃんが残したメッセージが、当時の自分と重なったという橋本さん。「親から愛されたくて、必死に字を覚えて書いたんだろうな。僕も親から認めてもらいたくて、必死にその方法を考えていた時期があった。受け入れてもらえない苦しみは、もう誰にも経験してもらいたくない」

講演依頼や問い合わせはブログ <https://internareberty.hatenablog.com/>で。【坂根真理】

性犯罪被害者の相談窓口、24時間体制に 県済生会病院 中日新聞 2018年7月8日

「被害者は一人ぼっちではない」と話す細川センター長＝福井市和田中町舟橋の県済生会病院で



県済生会病院(福井市和田中町)にある性犯罪被害者の相談窓口「性暴力救済センター・ふくい(通称・ひなぎく)」が九日から、相談対応時間を二十四時間、三百六十五日体制に拡充する。これまでは平日の日中のみ受け付けてきたが、被害からケアまでの時間が短いほど効果的な支援ができるとされ、被害者がより声を上げやすい環境を整えた。同病院産婦人科医の細川久美子センター長は「被害者は一人ぼっちではないと伝えたい」と話す。

「ひなぎく」は、性犯罪、性暴力の被害者を支援する目的で二〇一四年四月に開設された。昨年度は新たに四十六件の相談があり、うち未成年からの相談が十六件あった。資金や人繰りの問題から、相談時間は平日午前八時半～午後五時に限られてきたが、全国四十四カ所の同様の窓口のうち約三割は二十四時間体制を整えていることもあり、県の支援を受け、拡充することになった。

ただ、夜間時間帯にひなぎくにかかってきた電話は、臨床経験のある看護師や保健師が所属する外部委託業者に転送される。相談を受けた看護師らは、被害者に緊急の処置が必要と判断した場合には、県済生会病院に連絡。救急センターの医師が緊急避妊薬の処方や妊娠検査などを行う。ひなぎくによると、仕事や家庭を持つ被害者は日中に電話を掛けづらいため、夜間相談の需要が見込まれる。

性犯罪を厳罰化した改正刑法は、十三日で丸一年を迎える。家庭内での性的虐待を念頭に、親などの「監護者」が立場を利用して十八歳未満に性的な行為をすれば、暴行や脅迫がなくても罰することができる「監護者わいせつ罪」などが新設された。ただ、兄弟らからの被害もあり、監護者と認められない人が加害者になる恐れも指摘されている。

ひなぎくには、兄弟からの性被害についての相談も年に数件のペースで寄せられているという。その場合、加害者と被害者の両方を抱える親のケアも求められ、連携機関も多岐に及ぶ。細川センター長はこれらの問題に触れ、「長期的な支援をどう続けていくかが今後の課題だ」としている。ひなぎくの電話窓口は、0776(28)8505。九日午後五時以降、二十四時間体制になる。(藪下千晶)

次々記録更新、来場者大きな拍手 前橋で障害者の陸上大会 東京新聞 2018年7月8日

県内初開催となる国内最高峰の障害者スポーツ大会「2018 ジャパンパラ陸上競技大会」が七日、前橋市敷島町の正田醤油（しょうゆ）スタジアム群馬で始まった。二〇二〇年の東京パラリンピックへ向け、六カ国から約三百九十人がエントリーし、車いすの100メートルなどに挑んだ。六日夜には市内で開会式があり、記者会見でリオパラリンピックの走り幅跳びで連覇した招待選手のマルクス・レーム選手（ドイツ）らが意気込みを語った。



力走する車いすランナーたち＝前橋市で

大会は二十八回目を迎え、日本障がい者スポーツ協会の主催。記録は国際公式記録として認定され、東京パラリンピックへの参考となる。

記者会見するリオパラリンピック金メダリストのマルクス・レーム選手＝前橋市で



この日は100メートル、400メートル、1500メートル、1万メートル、リレー、三段跳び、走り高跳び、円盤投げ、砲丸投げがあった。100メートルなどで続々と大会記録や日本記録が更新され、その度に七百四十二人の来場者から大きな拍手が上がった。

最終日の八日には、レーム選手が出場する見込みの走り幅跳び、200メートル、800メートル、1500メートル、5000メートル、やり投げ、こん棒投げを予定している。入場無料で、先着順の全席自由席となる。

記者会見では、8メートル40の世界記録を保持する脚が不自由なレーム選手は「オリンピックに出たいという気持ちもある。どのような障害があるのかではなく、どんな能力を持つのかを見てほしい。障害があっても、夢を持ち続ければ実現することを多くの方々に伝えたい」と情熱的な口調で述べた。（菅原洋）

社説：「夜間中学」が教えること 週のはじめに考える 中日新聞 2018年7月8日

小中学校で勉強する機会を逸した人々が、自分の学びを取り戻しています。公立中学校の夜間学級。希望を編み直す自由がそこには広がっています。

猛暑が和らいだ夕刻。東京の葛飾区立双葉中学校に、かばんを抱えたふだん着姿の人々が集まりだしました。夜間学級の生徒たち。

四十二人がめいめいの習熟度に応じ、必修教科を学んだり、日本語を習ったりします。五時半から九時まで給食を挟んで四時限。授業はもちろん、無償。多世代、多国籍のグローバル社会です。

学び場はグローバル

ネパール人のカトリ・ヒマルさん（19）は日本語を学ぶ。インド料理店のコックの職を得た父と母とで、二年前に来日しました。

故郷は山岳地帯の農村。交通の便は悪い。歩いて片道二時間の道のりでは通学できず、中学相当で諦めてしまった。インターネットを使い、独学したそうです。

ヒマラヤ山脈を擁するネパールは、豊かな水資源に恵まれ、水力発電が主流です。けれども、基盤整備が立ち遅れ、電力を賄えない地域が農村部を中心に広がる。

「日本の工業高校で電気工学を勉強し、母国の水力発電の発展に貢献できればうれしい」。将来を真っすぐに見据えればこそ、学びに貪欲になれるのかもしれない。

十一月に七十九歳になる在日朝鮮人の崔元一（チェウォンイル）さんは、八つ下の妻朴榮喜（パクヨンヒ）さんと机を並べています。

戦時中に疎開した山形の小学校で四年余。帰京して朝鮮初級学校に入り、言葉に難儀した。朝鮮戦争が勃発し、今度は日本人の中学校で二年間。民族教育の機運が高まり、また

朝鮮中高級学校へ移ったが、途中で学資が尽きました。

九人きょうだいの長男。幼少期から家業を手伝い、江戸川の土手の草を刈り、牧場主に売った。三輪トラックを運転し、荷物を運んだ。苦労を重ねた人生です。

後押しする法律施行

母は日本人。政治に翻弄（ほんろう）されたような学校生活でした。「日本と朝鮮の関係が頭を離れない。私は板挟み。歴史の産物です。古代史を学んで本を正し、融和をめざしたい」。欠けた自我のかけらを探すかのごとく学び直す日々です。

通称「夜間中学」。明治の近代学校制度の創始と共に歴史を刻んできました。昭和の戦争期に消えたが、戦後間もなく復活した。

困窮家庭は多く、子どもは貴重な労働力でした。昼間に家事や仕事を任され、通学できない子や戦災孤児に学びをと、熱心な先生が開いた。一九五五年、全国でおよそ九十校に五千人が学んだとも。

国は一貫して背を向けた。学校制度の根幹を脅かすと心配したのです。抗（あらが）うように増えたのは、草の根ボランティアらの自主夜間中学や識字講座。残念ながら、中学卒業扱いにはなりません。

枠組みに収まらない不登校生や実質的に学べなかった形式卒業者、国際結婚や就労に伴い来日した外国人らの「学びたい」の声は多く、強い。人権としての学ぶ権利に応えるのは国の務めです。

教員免許を持つ先生が、学習指導要領に則して教える公立夜間中学は八都府県に三十一校。生徒は千七百人程度にとどまります。

ようやく二年前、後押しする教育機会確保法が施行された。埼玉県川口市と千葉県松戸市が来春の開校をめざし、生徒募集に乗り出しました。学ぶ意味さえ分からないまま成績ばかりを競い合う教育に風穴を開けるかもしれません。

九三年に公開された山田洋次監督の映画「学校」は、夜間中学を描き、世に存在を知らしめた。

五十すぎに読み書き、計算を学び始めたイノさんが急死する。学級担任の黒井先生と同級生たちは冥福を祈りつつ語り合います。

イノさんは幸せだったのか。幸福とはどういうことか。議論迷走の末、元不登校生のえり子が問いかける。「だから、それを分かるために勉強するんじゃないの。それが勉強じゃないの」

双葉中の夜間学級に通う新谷藍吾さん（16）は、二年次からやり直しています。昼間の中学では二年から病欠を繰り返し、授業について行けないまま卒業を迎えた。

前の中学では、テストの答案用紙に順位が書き込まれた。夜間の先生は「これからどうするかを考えるテスト」と言う。質問に丁寧に答えてくれ、勉強が楽しい。

幸福追求のよすがに

昼間の中学時代には周りの目が気になり、不登校になったという三年の女子生徒（16）。希望の進学先を通信制から定時制の高校に切り替えた。「友だちをつくりたい」と明るく語る。大切にされているという思いが伝わります。

学校とはなにか。教育とはどうあるべきか。そんな難しい問いに、夜間中学は自ら答えを示しているのかもしれない。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

